Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-25

N・ルーマンの構成主義の社会理論ー社会的な「構成」とその時間性についての研究ー

梅村，麦生

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2014-03-25
(Date of Publication)
2015-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6011号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006011

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

N・ルーマンの構成主義の社会理論
－社会的な「構成」とその時間性についての研究－

氏　　名　：　　梅村　麦生

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）白鳥　義彦　准教授
（副）油井　清光　　教授
（副）松田　毅　　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

【論文要旨】

1. 研究背景と問題設定

現代社会学の中で、理論的な枠組として一定の役割を果たしているのが、社会学における「構成主義」ないし「構築主義」（social constructivism）の立場である。その中では、社会的な「構成」や「構築」ということが中心的な概念として用いられている。社会学の中でこの立場が登場した背景としては、社会的な背景と学説史的な背景の双方が考えられる。まず社会的な背景としては、1960 年代以降、世界中でさまざまな抵抗運動や社会運動が展開され、旧来の制度や差別がいかに「社会的に構築」されたものであるかが訴えられるようになった。この流れに沿い先駆となった研究として、「現実」が「社会的に構成（構築）」されたものであることを説いたピーター・L・バーガーとトマス・ルックマンの『現実の社会的構成』（P. L. Berger/Th. Luckmann, *The Social Construction of Reality*, 1966）がある。またその後、ジョン・I・キツセとマルコム・スペクターの研究（J. I. Kitsuse/M. Spector, *Constructing Social Problems*, 1977）が端緒となった社会問題の「構築主義」や、ミシェル・フーコーの研究などの影響を受けた言説分析の「構築主義」の主張が現れた。また、これらの「構築主義」以外の論者の中でも、特に往時に流行した「機能主義」や「構造主義」に対する反論として、社会には確固たる「構造」とその「機能」があるのではなく、社会は人びとによって不断に「構成」されるものである、と主張する社会理論が現れてきた（一例として、A. Giddens, *New Rules of Sociological Method*, 1976）。

しかし、社会学の中で「構成主義」や「構築主義」の社会理論がさまざまに展開されていく中で、次第に社会的な「構成」「構築」をめぐる議論群にも問題が見えてくるようになってきた。まず、「構成」「構築」概念の内容自体が多義的になってきた、ということが挙げられる。さまざまな社会現象が「構成」「構築」されたものと言われるようになったことで、この「構成」「構築」が指す内容が多義的になり曖昧になっている（例えば、Renn et al 2012 参照）。それと併せて、社会的な「構成」「構築」という概念の積極的な意義も疑問に付されるようになっている。社会的な「構成」や「構築」の概念は社会学における旧来の諸概念への批判を込めて用いられるようになったが、その反面でこの概念自体の含意が必ずしもはっきりとしていない。社会的な「構成」や「構築」の概念に、既存の社会現象や制度が「社会的に構築」されたものであることを指摘し批判する「闘争」概念（参照、Hacking 1999=2006）以上の積極的な意義がどこにあるのか、ということが問われている。

さらに、構成主義の視角を取り入れた現代の知識社会学は、知識と社会の再帰的な関係を想定し、社会思想と当代の社会との関係を問うが（参照、Luhmann 1980）、この「構成主義」や「構築主義」の社会理論自体は、現代社会といかなる関係に立っているのか、つまり現代社会のどのような側面を反映しているのか、ということも、これまで必ずしも十分に議論されていない。

以上のように、社会学における「構成主義」「構築主義」の潮流の中で、社会的な「構成」「構築」の概念は、ともすれば曖昧なまま用いられてきた。しかし他方で、その曖昧さと多義性ゆえに、真意が次代に汲み取られず、そのまま継承されているとは言えない状況にあることにも問題がある。

その中で、本稿が取り上げて注目するのは、ニクラス・ルーマンの「構成主義」の社会理論である。本稿ではルーマンの構成主義を、同時代の他の社会理論と比較し、またそれ以前の社会的な構成の議論や、他の分野での構成主義の議論とも比べながら検討し、その内実を明らかにする。その上で、社会学における「構成主義」に含まれる社会的な「構成」の概念の多義性を整理し、そこに含まれる一貫した構想と今日的な意義を見出すことを目指す（以下、基本的に「構成」と「構成主義」の語に統一する）。

2. 研究対象と分析枠組

初めに、現代社会学における構成主義の方法論的な意図と、そのもとでの「社会的構成」の概念の内容的な含意について探るため、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』を筆頭に、「構成」やそれと類似する「構造化」の概念を軸とした幾人かの社会理論を検討する。同時代の社会的背景と、学説史的な背景を踏まえて、社会学において構成主義と「構成」の概念が浮上してきた経緯について考える。

次に、「社会的構成」が浮上した経緯とその意図についてより詳しく見ていくために、社会学における構成主義の前史とも言うべき論者による議論を取り上げる。特にここで注目するのが、バーガーとルックマンを含めた「社会的構成」を説く多くの社会理論に対して影響を与えている、アルフレート・シュッツによる多様な「構成」の議論である。シュッツによる「社会的世界」の「意味的構成」の議論を見る中で、われわれは社会科学および社会学の中で「構成」が問題化されてきた過程を踏まえることになる。本稿ではシュッツを通して、社会学における「構成」の概念に含まれる複数の契機を明らかにすることを狙っている。

シュッツによる社会的世界に関わる多元的な「構成」の議論を踏まえた上で、本稿が現代社会学における構成主義の社会理論を代表するものとして取り上げるのが、ニクラス・ルーマンの社会理論である。このルーマンも、自身の社会理論を展開するにあたり、シュッツの「意味的構成」の議論から多くを取り入れている。そこで初めに、ルーマンの社会理論が、いかにシュッツの現象学的な行為理論における意味の議論を取り入れているのかを見ていき、その上でシュッツとルーマンの双方の社会的な「構成」に関する議論の関係と相違について確認する。特にルーマンは、シュッツによる「同時性」の議論を意味の時間次元での話としてよく参照しているが、本稿でも「構成」の議論と併せてシュッツの「同時性」とルーマンの「同時性」を検討する。これらを踏まえて、シュッツの行為理論における「意味的構成」の議論から、ルーマンにおける構成主義の社会理論への発展と相違を見ることになる。

そしてこれらの後で、ルーマンの「ラディカル構成主義」と言われる社会理論の内容について分析する。「ラディカル構成主義」自体は隣接他分野の中で初めは構想された視角でもあるため、初めにそれらの主張も踏まえておく。その上で改めて、ルーマンが主張した社会理論としての「ラディカル構成主義」がいかなるものかを見ていく。そうすることで、他の分野における「構成主義」や、社会学で以前から論じられていた「構成」の議論とは異なる、社会学的な構成主義の社会理論の特徴を浮上させる。最後には、現代社会学における「社会的構成」の概念に「時間性」の主張が現れていることを踏まえ、現代的な「時間の社会学」の可能性について触れる。

現代社会学における構成主義的な社会理論を検討する中で、アルフレート・シュッツの行為理論へと遡っていく理由は、(1) 彼の現象学的な知見を取り入れた行為理論がさまざまなかたちでのちの構成主義的な諸理論へと影響を与えており、(2) さらにシュッツ自身の主張の中に、多様な意味での「構成」が現われ出でている、ということにある。そして「社会的構成」に関する議論の中でニクラス・ルーマンのシステム論的な社会理論を選択した理由は、(1) 彼の「構成主義」が自身の社会システム理論に基づき、「構成」をめぐる社会学の諸議論のなかでより抽象的な理論を提起しており、(2) 他に「ゼマンティク」論を説き、社会と知識との関係について論じ、さらに (3) 数多くある「構成」に関する議論のなかで、従来の社会理論についてよりきちんと検討を加えており、比較考量がしやすくなっていること、による。本稿ではルーマンの構成主義のうちに、社会学の古典以来取り組まれてきた社会理論の構想に対して構成主義の視角が取り入れられている様子を見ることになる。

3. 内容

第一章「構成主義の時代と社会理論」では、本稿で取り上げる構成主義の社会理論と同時代の言説を背景として確認した上で、社会的な「構成」について論じている現代の社会理論から特に代表的なものとしてバーガーとルックマンの『現実の社会的構成』、ブルデューの『実践感覚』、ギデンズの『社会の構成』、ルーマンの『社会の社会』における「構成」の用法について検討した。その中で、第一には方法論的含意として旧来の二元論の超克が目指されており、彼らが前代の諸理論に見出した主観主義的傾向、客観主義的傾向、主観／客観二元論批判の意図があるということ、第二にはそのための方策として、社会的な媒介となる知識やメディアの概念が構想されている、ということが明らかになった。とりわけ彼らは機能主義や構造主義、行為論や実存主義における行為／構造、個人／社会といった二分法に対して、「知識在庫」、「構造化」、「ハビトゥス」、「コミュニケーション・メディア」といったそれらの分断を架橋する第三項的な媒介概念を提起している。また「構築主義」の研究も、社会問題の研究や言説分析を行なうにあたって、旧来の研究者と対象との分断を克服するために、両者をつなぎ合わせる可能性をもつものとして言説や闘争の場、それらにおけるレトリックの記述を分析の対象としている。

第二章「構成主義の社会理論の前史」では、「構成」概念を用いた社会理論の構想の先駆として、アルフレート・シュッツ（A. Schütz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, 1932）の「構成」概念を検討した。特に『社会的世界の意味構成』におけるシュッツの Aufbau, Konstitution, Konstruktion という構成に関する三つの概念を、シュッツが参照しているヴェーバー、フッサール、シェーラー、ディルタイ、カルナップといった論者における「構成」を遡って踏まえながら検討した。そのなかで明らかになったのは、シュッツは社会科学とその対象である社会的世界の意味的な「構層」（Aufbau）の特性を、行為者による意味の「構成」（Konstitution）を、社会科学者の理念型的な「構築」（Konstruktion）から行為者自身による理念型の構築を介して追求することのうちに見たということであった。「構成」が多元的に成り立っているということは、現代の社会理論における「構成」概念の多様さにも反映されている。

第三章「現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論における〈構成〉」では、社会システム理論を論じ、また方法論として「ラディカル構成主義」を採用した現代の社会理論家であるニクラス・ルーマンがシュッツの理論をいかに取り入れ、また批判しているのかを参照することをとおして、シュッツに現れている社会科学における「構成」の問題化の前史から、ルーマンによる「構成主義」としての社会理論への継承と発展を見た。ルーマンは現象学的な意味分析においてシュッツの「意味構成」の議論を参照しており、意味のもつ「社会性」と「時間性」、「類型性」の構想を取り入れている。他方で、社会的な次元を何らかの次元に還元したり、また隠蔽したりしようとする主張に対しては批判し、社会的なものそれ自体の存立を説いている。「間主観性」と「コミュニケーション」の概念に、両者の立場の違いが現れている。しかしとりわけルーマンの「構成主義」とシュッツの「意味構成」の両者において、社会的なものの成立の前提として時間的な「同時性」があると説枯れている点で共通する。

第四章「社会的な構成な場としての〈同時性〉」では、以上で明らかになった「構成」の内容的含意に「時間性」があるということをもとに、シュッツとルーマンにおける「同時性」の概念を検討した。シュッツの時間論の背景には、エドムント・フッサールの内的時間意識とアンリ・ベルグソンの持続の議論がある。その上でシュッツは、行為者たちの意識の流れの同時性が彼らのあいだでの共同を可能にし、彼らのあいだでの共同が行為者たちの意識の流れの同時性を感じさせる、ということを説いた。他方でルーマンは、あるシステムが創発するとき、そこにそのシステムの内側と外側とのあいだでの同時性が立ち上がり、システム独自の時間が流れるようになる、と説いた。つまり個人ならぬ社会的なシステムが立ち上がるとき、そこに社会的なるものを社会的ならざるものから区別する境界が生じ、そこに同時性が、そして社会的な時間が産み出される、と。ここに、シュッツからルーマンへの変化として、行為理論から社会理論への、また Konstitution から Konstruktion への舵が切られていることが見て取れる。また社会学的な時間論という観点から、社会の諸領域についてのルーマンの諸議論を見直すことができる。

第五章「構成主義の社会理論」では、ニクラス・ルーマンの構成主義の社会理論を分析するために、他の構成主義・構築主義での要点を踏まえ、「構成主義の認識プログラム」論文を中心に検討を行なった。そこであらためて判明したのは、「構成主義」には二元論批判や認識の不確実化の意図があるということ、他方で端緒の恣意性がいかに喪失しているのかを示すためにコミュニケーション・メディアの分析のような別の理論を要するということ、また「構成」概念には「時間」についての特有の視角が含まれており、「同時性」としての「構成」や「同時代性」「近代性」としての「構成主義」について捉える必要があるということ、であった。とりわけ他分野や他の論者の「構成」と比べると、ルーマンは「社会の構成」を認める点で際立っている。そのかぎりで、社会学の伝統の上に立っている。

4. 結論

ルーマンの構成主義と同時代の社会理論を見ていく中でまず明らかになったことは、社会的な「構成」や「構造化」に注目した同時代の社会理論は、いずれも社会学における従来の二元論的な傾向を批判し、それに対する媒介となる過程や代替となる概念を提示する意図をもつものであった。バーガーとルックマンは、個人と社会をつなぐものとして「知識」を想定した。彼ら以降、個人と社会を素朴につなぐ構想はあまり立てられていないが、特に行為と構造といったミクロな概念とマクロな概念をつなぐものとして、ギデンズはより抽象的な「構造化」の過程を想定し、ブルデューは個人のうちに身体化された実践の論理として「ハビトゥス」の概念を提起した。その中でルーマンは、必ずしもそうした媒介概念を提示しているわけではないが、旧来の二元論批判という視点は共有している。個人と社会、行為と構造といった二分法で論を立てる代わりに、コミュニケーションの連鎖が社会を構成している、と述べる。社会とその部分領域にとって肝心なのはコミュニケーションの連鎖であり、その手がかりとなるのがコミュニケーション・メディアである、と。

さらに、シュッツに遡って見てきたように、社会学における社会的な「構成」の概念と構成主義の社会理論は、現代社会学の中で突如現れたものではなく、これまでの社会科学と社会学の方法論の中で提起された「構成」に関わる諸構想を受け継ぎ発展させたものであった。シュッツによる『社会的世界の意味構成』における「構成」の議論を繙くと、社会科学や人文諸学とその対象としての社会的世界の独自性、意味の時間性、社会的世界とその世界に生きる人びとの理解における理論負荷性・類型拘束性の問題が含まれていた。シュッツの言葉でいえば、社会的世界に生きる人びとが用いる類型を、学的な類型によってアプローチするという、「二次の構築」の問題が社会科学のうちにはある。

ルーマンの構成主義の試みも、シュッツが取り組んだ意味の構成と社会科学の構成の問題を踏まえている。しかしルーマンは現代の社会学者として、学的観察者もまた社会的世界に生きる者であり、学的営為もまた社会の産物に他ならないという、社会学にとっての対象の社会とのあいだの再帰性・自己言及性を考慮しなければならなかった。さらに、シュッツは意味の問題に取り組むにあたり、主体の意識とそれがもつ反省の能力に依拠して

いたが、ルーマンはあくまで個人の意識と社会とは区別されるべきものであり、意味は社会の操作にも属するものとして、主体の反省の能力に還元することを避けるという社会学の伝統的な思想からも離れなかった。これら二点を踏まえて、ルーマンは社会的なもの、社会それ自体による「構成」を説く、「ラディカル構成主義」の社会理論を提起した。ただしその社会理論の端緒には、当然ながらルーマンが措定した区別が据えられている。したがってルーマンは、「認識」や「観察」が「構成」の営みであり、「現実（リアリティ）」もまた「構成」の産物であるという、同時代の他分野の「構成主義」と共有する視角を取り入れつつ、社会もまた認識や観察をとおして構成を行なうものであること、そして社会の中ではあらゆる構成がコミュニケーションをとおしてなされるということ、を主張している。その中で「構成主義」を、近代社会において分出した科学が、自己の不確実性を反省する認識論として規定している。そのかぎりで社会学における構成主義とは、社会の中で社会を記述するという社会学の営みの不確実性を反省するものである。

しかし構成主義の社会理論は、端緒の恣意性や認識の不確実性を指摘するにとどまるものではない。むしろそうしたことを前提として、端緒の恣意性がいかに喪失していくかの過程を記述することを目指すものでもある。ルーマンがそのとき手がかりとするのは、コミュニケーション・メディアの理論である。さらに、「社会的構成」の概念には、現代の社会に特有の時間性がある、という含意がある。強調されているのは、同時性である。この考えは、近代社会はそれまでの時代・社会と異なる時間性をもつと説いた従来の社会理論の流れの上に立つ。この点は、他の構成主義や構築主義、構造化理論などとも暗に共有されている。構成主義という視角のもつ同時代性が想起される。

結論として、「社会的構成」「構成主義」の構想は、単に社会現象の自明性を疑ったり、「脱構築」したりする点のみならず、社会学における方法論的意識と、社会現象における時間の要素の重要性、そして現代社会に特有の時間性について考えなければならないということを喚起させる点に今日的な意義を有している。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	梅村　麦生
論 文 題 目	N・ルーマンの構成主義の社会理論―社会的な「構成」とその時間性についての研究―

要　　旨

本論文は、現代社会学において理論的な枠組みとして一定の役割を果たしている「構成主義」、「構築主義」に注目し、その学説史的な展開の基礎づけの上に二クラス・ルーマンの「構成主義」の社会理論を位置づけて、その意義を明らかにしようとするものである。そのために、より具体的には、ルーマンの構成主義を同時代の他の諸社会理論と比較し、またこれに先行する社会的な構成の議論や、他の分野での構成主義の議論とも比較しながら検討し、その内実を明らかにする。その上で、より広くは、社会学における「構成主義」に含まれる社会的な「構成」の概念の多義性をルーマンの理論を軸に据えながら整理した上で、そこに含まれる一貫した構想と今日的な意義を見出すことを目指している。

以下に、各章ごとの要点を示し、本論文の審査の要旨を述べる。

「序章」では、社会的な「構成」「構築」といった視点の現代社会学における重要性とともにその概念の多義性や曖昧さが指摘された上で、本論文の目的ならびに構成が提示される。

「第一章　構成主義の時代と社会理論」では、構成主義の社会理論が生まれてきた時代的背景や理論的背景が検討され、社会的な「構成」という概念がいかなる方法論的な意図と内容的な含意を伴って用いられているかということが分析され、整理される。また、構成主義的視角に共通する出発点としての二元論批判という観点から、主観／客観、行為／構造といった二元論の克服・代替としての、社会理論における媒介概念についても論及がなされる。具体的に取り上げられるのは、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』（1966）（媒介概念として「知識」が提示される）、キツセとスペクターの『社会問題の構築』（1977）などを出発点として、ギデンズ（「構造化」）、ブルデュー（「ハビトゥス」）らの議論、そしてルーマン（「ゼマンティク」、「コミュニケーション・メディア」）である。

「第二章　構成主義の社会理論の前史―社会的な『構成』の問題化」では、ルーマンの「構成主義」の社会理論に至る理論的、学説史的な先行者としてとりわけシュッツの議論が検討される。またそれとの関連の中で、ジンメル、フッサール、ヴェーバーなども取り上げられる。ここでシュッツが考察の対象とされる理由としては、彼の現象学的な知見を取り入れた行為理論が様々な形で以後の構成主義的な諸理論に影響を与えていること、さらにシュッツ自身の主張の中に、多様な意味での「構成」が現出している、という点が挙げられる。シュッツは、そもそも行為者自身が「構築」を用いるということ、つまり行為者による意味「構成」のうちに、他者の理念型「構築」が含まれているということ、他方で「観察者」から見れば、自身による「構築」の向こう側に行為者自らによる「構築」があり、それを通してのみそこに控える行為者の「構成」に近づくことができるということを説いており、これらすべてを含めて、社会的世界の意味的で多人格的な「構層」は成り立っていると考えられるのである。

「第三章　現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論における『構成』」では、社会システムを論じ、また方法論として「ラディカル構成主義」を採用したルーマンが、シュッツの理論をいかに取り入れ、また批判しているのかを参照することを通して、シュッツに現れている社会科学における「構成」の問題化の前史から、ルーマンによる「構成主義」としての社会理論への継承と発展が検討される。ルーマンが自らの社会理論に自己言及性さらにオートポイエーシスの概念を導入し、また社会的システムの要素を「行為」ではなく「コミュニケーション」であると述

主査記載 氏名・印	油井　清光

べるようになって以降、シュッツに対する距離も変化する。『社会的システム』では、社会的次元に関して、間主観性のもとで統一を求めるのではなく、社会的なものそれ自体、コミュニケーションのもとに統一がある、とされ、「間主観的構成」といった表現も用いられなくなる。ルーマンは、社会科学における「意味」や「観察者」の問題をシュッツから受け継ぐが、「観察者」の位置に「個人」や「主体」ではなく、「社会」を置く点、また「同時性」も個人と他者の同時性としてではなく、社会（社会的システム）とその環境との間の同時性としてとらえる点に相違が見出される。

「第四章　社会的な構成の時間としての『同時性』」では、上記の検討を通じて明らかになった、「構成」の内容的含意としての「時間性」という観点から、シュッツとルーマンにおける「同時性」の概念が検討される。シュッツの時間論と「同時性」の議論の背景には、フッサールの内的時間意識とベルグソンの持続の議論がある。そうした背景のを踏まえた上でシュッツは、行為者たちの意識の流れの同時性が彼らの間での共同を可能にし、彼らの間での共同が行為者たちの意識の流れの同時性を感じさせると説いた。これに対してルーマンは、あるシステムが創発する時、そこにそのシステムの内側と外側との間での同時性が立ち上がり、システム独自の時間が流れるようになると説いた。ここに、シュッツからルーマンへの変化として、行為理論から社会理論への、また「構成」から「構築」への舵が切られていることが明らかにされる。

「第五章　構成主義の社会理論」では、ルーマンの構成主義の社会理論をより深く分析するために、「構成主義の認識プログラム」論文を中心に検討が行われる。この検討を通じて明らかになったのは、「構成主義」には従来の二元論を批判し、その対立を置き換えたり媒介したりする過程に注目する意図があるということ、認識の根拠づけではなく、認識の不確実性についての反省に力点が置かれるということ、現象の端緒の恣意性がいかに喪失しているのかを示すためにコミュニケーション・メディアの分析のような別の理論を要するということ、「構成」概念には「時間」についての特有の視角が含まれており、「同時性」としての「構成」や、「同時代性」ないし「近代性」としての「構成主義」についてとらえる必要があること、といった諸点である。

「終章　社会的な構成の時間性―現代社会の時間と『時間の社会学』について」では、本論文で得られた諸知見があらためて整理された上で、ルーマンの時間論からの展開という視点から、「時間の社会学」の可能性が展望される。

本論文は、ルーマンを軸として「構成主義」の意義をあらためて明らかにしようとする意欲的な内容のものである。また幅広い文献を緻密に読み込んだ上で論を堅実に展開していく姿勢も高く評価される。社会学における理論的研究の展開、あるいはまたルーマン研究の展開といった観点からも、本研究で得られた成果の意義は大きい。理論的、学説史的研究の側面に力点が置かれているために、現実の社会における具体的な諸問題にどのように応用され得るのかといった点に関する考察が十分にはなされていないといったことを、残された課題として例えば指摘することが可能であるにせよ、そうした点も含めて、この研究成果を土台としてなされる今後の研究の発展も大いに期待されるところである。

以上の審査に基づき、本審査委員会は論文提出者・梅村麦生が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	油井　清光	副　査	准教授	平井　晶子
副　査	教授	藤井　勝	副　査	准教授	白鳥　義彦
副　査	教授	松田　毅　　印			